## 深い学びのために

### 学習のポイントの解答例

**1** **本文の構成を、分かりやすく図にしてまとめてみよう。**

【答】

**基本概念**　①すぐれた能力　②すぐれた能力を見出す能力

**第一段**（A）

①をもつ者（千里馬）は常にいる。⇕②をもつ者（伯楽）は常にいるわけではない。

←

②をもたない者（奴隷人）のために①が発揮されないままである。

**第三段・第二段**（A′）

①を発揮するためには適切な待遇が必要。↕②がないために適切な待遇が与えられない。

←

①をもつ者は十分な待遇を与えられないため、①を発揮できない。

**第四段**（B）

②をもたない者は、自らのせいで①をもちながら発揮できない者を目の前にしながら、①をもつ者がいないと言う。

**第五段**（A″）

①をもつ者がいないのか。⇕②をもっていないからではないか。

**▼ポイント▲**　①と②の二つの基本概念をまず理解した上で、①をもつ者と②をもたない者を対比し、それによって①がありながら不遇であることを述べるパターンをAとして確認する。さらに適切な待遇と発揮される能力の関係への言及によって、第二・三段が第一段を具体的に展開していることに注意する。第一段末の「不下以二千里一称上也」と第三段末の「安求二其能千里一也」が呼応していることなどを例示してもよい。

第四段は、「策レ之…」「食レ之…」「鳴レ之…」のように①をもつ者と②をもたない者の具体的な行為を同じ型の文で繰り返し、「執レ策而臨レ之」以下の文で直接の発言として②をもたない者の無自覚さ、無責任さを読者に印象づける。この場面提示型の第四段によって、それまでの客観性を一定保持した叙述から、主観性の強い倫理的な問いへの展開が行われ、第五段の問いを準備する。そのため、パターンを変えてBとした。

第五段の問いは、表面的には冒頭の二つの主題の提示の変奏となっているためAパターンではあるが、その背後に、才能ある者の不遇の責任の所在を問う姿勢があることも見える。Bをふまえた上でのAであり、冒頭の繰り返しではない。

なお、第三段と第四段を、①をもつ者の不遇と②をもたない者の傲慢さとの対比として捉えることもできる。その場合、第三段は第二段の対比を受ける役割があると同時に、第四段と対比的関係にあるという二重の機能をもつことになる。

## 言葉と表現の解答例

**1** **本文中の「其」を全て抜き出して現代語訳し、意味の違いについて分類してみよう。**

【答】

・其↓主部（P一五八、5・7行目）「その馬が」
・其↓属性（P一五九、1・2行目）「その馬に適した」「その馬の」「その飼い主の」
・其↓助字（P一五九、3行目）「そもそも」

▼**ポイント▲**　P一五九、3行目の二つの「其」は、「其…邪、其…邪」のような形式で、句末の疑問助詞を強調する働きをし、「いったい…だろうか、それとも…だろうか」という選択的な疑問を提示する。

## 言語活動の解答例

**1** **作者は「伯楽」や「千里馬」の話に例えて何を言おうとしているのか、話し合ってみよう。**

【答】　人材（「千里馬」）を登用するには、まず人材を見抜いて適切な待遇を与える人（「伯楽」）が必要であり、後者が少ないために才能がありながら不遇である者が多いことを訴えている。

▼**ポイント▲**　この文章では、名馬と伯楽の比喩を用いて、「人が才能を発揮するためには、その人を見出して活躍できる場を与えてくれる人が必要だ」と述べると同時に、才能がありながら見出されず不遇のままにいる人への強い同情と、それを座視している為政者への強い非難を示そうとしている。「学習のポイント」1で読解したように、この文章はたんに前者のみを述べようとしているのではなく、後者をベースとした倫理的な問いに力点があるとすべきだろう。それを理解するためには、まず「学習のポイント」1をていねいに作業していることが前提となる。

さて、韓愈は科挙に及第して中央官僚となった新興階級の知識人であったが、八世紀から九世紀にかけての中国の人材登用制度には、蔭位の制など、高官の家柄を優遇する側面がなお強く、科挙による登用は門閥貴族と政治権力との結びつきの下にあった。これについては世界史の参考書等でも確認できるので、唐代の科挙制度について生徒自身に調べさせてもよいだろう。科挙知識人と門閥貴族との争いについて一通りの知識を得ておくことは、唐詩の背景を知る上でも重要である。

この文章の制作年代については、韓愈が進士に及第した後の七九五年から八〇〇年ごろとされるが、その主張がおそらく生涯変わらないものであったことは、孟郊、張籍、李賀など、不遇の年月を過ごした友人たちへの敬意からも、想像できる。余裕があれば、こうした詩人たちの略歴について、それぞれグループにわかれて調べるのも理解を深める一助となる。

（齋藤　希史）